

## はじめに

本冊子は、平成 23 年度学内研究助成（21 世紀教育開発奨励金）による共同研究「近畿大学の大学アーカイヴズ構築に関する基礎的研究」の成果をまとめたものである。

1925 年の創設以来、本学では様々な書類や資料が蓄積されているが、残念ながら、それらが完全な形で整理、保管されている状態ではないと思われる。13 年後の 2025 年には開学 100 周年を迎えるため、100 年史の編纂がまもなく話題にあがってくることと予想されるが、そのためにも学内で作られてきた様々な事務書類や資料を、整理・保存しておく作業にただちに着手する必要があると感じている。

また、近年開始された自校教育においても、本学の歩みを振り返るための客観的資料として、学内でつくられた様々な事務書類や資料を活用していくことが求められている。

本研究は、こうした課題にとりくむために、保存年限が過ぎた大学事務文書や大学史の資料を収集・整理・保存・公開する大学アーカイヴズを近畿大学に構築するための基礎研究である。もちろん本学では 2000 年に世耕弘一初代総長の資料を中心に収集・整理するための建学史料室が設置され、2009 年には建学史料室の資料の常設展示スペースとして、不倒館がつくられている。この建学史料室の成果を生かしながら、本格的な大学アーカイヴズを本学に構築するために何が必要か、という観点から、自校教育や資料保存等に関心をもつ学内の教員 8 名の共同研究として取り組んだ。

本年度の研究は、最初の一步として、主に「近年国内各地の大学でつくられている大学アーカイヴズとは、どのようなものか」「各大学で大学アーカイヴズは、どのような意義をもち、どのような役割を果たしているか」ということを明らかにするために、各大学への訪問調査と公開講演会（2011 年 12 月 17 日の FD 研究集会）を中心に実施した。本冊子では、その成果として、訪問調査の結果、FD 研究集会の講演録、各大学アーカイヴズの規則などを収録した。

最近約 10 年間に、国公立大学・私立大学を問わず全国各地の大学で、大学アーカイヴズが構築されている。本研究を通して、各大学の大学アーカイヴズが、社会的な説明責任を果たす意義を認められながら設置され、大学事務の効率化、広報活動、資料にもとづく大学のアイデンティティ構築、自校史教育などに大きな役割を果たしていることが、改めて

明らかになった。また、FD 研究集会における寺崎昌男氏の講演によれば、大学の外部評価において、大学教育の内部質保証システムとして、大学アーカイヴズの有無が重視されるようになりつつあるという動きを知ることもできた。

大学アーカイヴズ設置のための具体的検討が学内で開始され、本書がそのための基礎資料として学内各部署で活用されることを心から期待したい。

本書の構成を紹介し、若干の補足説明を加えておきたい。

第 1 部「訪問調査の結果」では、国内 11 大学の大学アーカイヴズを訪問して、「貴学の大学アーカイヴズは、どのような組織でどのような活動をしているか」「貴学の大学アーカイヴズは、どのような意義をもち、どのような役割を果たしているか」などの点についてインタビュー調査した結果をまとめた。さらに特別編として、創立期を中心とした充実した展示館を有する九州工業大学と、韓国の延世大学および慶熙大学への調査結果も加えた。各大学の大学アーカイヴズの活動は多様であることや、専門知識をもった人材を含む専任スタッフと予算が必要であることなどが明らかになった。

第 2 部「全学 FD 研究集会「大学改革における大学アーカイヴズ」の記録」では、本研究のテーマをもとに 2011 年 12 月 17 日に実施された全学 FD 研究集会の講演記録である。立教学院本部調査役・東京大学名誉教授の寺崎昌男氏には、「大学改革における大学アーカイヴズの役割」について、多面的に提示していただき、学習院アーカイヴズの桑尾光太郎氏には、「学習院アーカイヴズの一事例」として、何気ない事務文書が後年貴重な資料になることなどを事例とともに紹介していただいた。この二つの講演をヒントに学内で活発な議論が開始されることを期待したい。

第 3 部「各大学アーカイヴズの規則等」では、大学アーカイヴズ設置について今後検討される際の参考資料となることを願って、各大学アーカイヴズからのご協力を得て学内規則や設置答申などを収録した。

第 4 部「研究会の活動記録」には、本研究プロジェクトの交付申請書や研究会議事録などを収録した。大学アーカイヴズ構築を目指す共同研究であれば、その活動自体も記録しておくべきであると思われたためである。

なお、各大学で「アーカイヴズ」「アーカイブズ」の二通りの表記が使われている。本書では原則として「アーカイヴズ」を採用し、記述上特に必要と思われた場合には「アーカ

イブズ」の表記を用いた。

本研究では多くの方々のご協力をいただくことで実施できた。とりわけ、訪問調査を受け入れて下さった各大学アーカイヴズの担当の方々、講演して下さった寺崎昌男氏、桑尾光太郎氏、見学やFD研究集会でお世話になった建学史料室、教育改革推進センター、学務部の方々には大変お世話になった。ご協力に心から御礼を申し上げたい。

2012年2月15日

研究メンバーを代表して 増田 大三